

モイモイのモイ

(一歩一歩のたった一歩)



クーレン山でもっとも激しい戦闘の行われたらしい北面山麓にある岩寺。周囲には無数の砂岩ボルダーが転がっているが、地雷のクリアーは現在でも完全ではなく、公開は控えている。エレファントボルダー全景。



クーレン山の頂上台地には幾つかの集落がある。岩壁を探す途中に現れた畑で遊ぶ子供たち。

クーレン山の空白部と シンポンの岩場

辺りに白い雲が広がっていた。僕は雲の上で寝ころんでいるらしい。少し経つと様子がおかしいことに気が付いた。途端に雲が白いタイルに変わった。起きあがると血だらけの顔をした人間がいて思わず息を呑んだ。鏡に映った僕自身だった。僕は夜中にトイレに立ち、水みたいなウンコをばらまいて失神し、前

のめりに昏倒したらしい。顔面をタイルにグシャッと打ち、前歯が2本折れ、下の犬歯が上唇を突き破った。鼻梁がぱっくり割れた。しかし痛みも何もない。これが死なら受け入れても悪くない。しかし何かの意志が働き、僕はこの世に引き戻された。アッチで、亡くなった両親や先輩、相棒が手を振っていた。帰ってきた酔っぱらいの有名なフレージ、オラは死んじまったであろが聞こえていた(ウソです

目指せ、 アンコールクラライマー誕生!!

けど)。明け方、チエに病院に運ばれた。すぐにアマーバ(アマーバ赤痢)が見つかった。顔を縫い終わると、タイ人の若いドクターが、合理的なムーブを見付けたクライマーみたいな口調で、70年代にネパールで身体に入ったのが復活したんだと、得意げに言った。びっくり!

退院すると、すぐに最適季の12月も終わった。僕の成果といえば、僅か2本の新ルートに16本のアンカー。そして、長年付き合ってきた僕をシステム開発プロジェクトに売り込んでくれるエージェントを1社失ったことか。同じ頃、マウントクックで友人が遭難した。最後に彼と登ったのは、瑞牆山の『モンタージュ』だったか、冬の『犬殺しの滝』だったか。とにかく1年に1本、ちゃんと登る、っていうのが僕らのルールだった。彼は山頂直下でビバークした。そして眠ったまま還らなかつた。僕もそうなるのも不思議は

なかった。でも僕は戻った。それは僕の意志を離れた出来事だった。

翌年2月、白馬村から若い助手人君が来た。僕らは孤児院の子供たちを連れてクーレン山にクライミングをしに行った。子供たちの喜々とした素朴な反応が僕の何かを呼び覚ました。僕は、地雷や不発弾、タフなジャングルで閉ざされたクーレン山に残された空白部、つまり北面や、頂稜直下の大きな壁にクライミングの可能性を探っていた。また、クーレン山同様にシエムリアプから近いシンポンの岩場にも。しかし、誰の何の計らいか、僕らはいつの間にか子供たちに適したエリアを探すようになっていた。

4月、日本に戻った。後立をスキーで細野へ降りて、なじみのロッジでビールを片手にPCを立ち上げると、古くから知っているガイド君からメールが来ていた。カンボジアに人工壁を作るなら資金提供する御仁あり。悪い冗談、そう思った。

(続く)